

国語 その一（八枚のうち）

次の文章を読んであとの質問に答えなさい。

（注）高校一年生の「ぼく」と小学四年生の「弟」は、父の死後、旅館に住み込みで働き続ける母の稼ぎだけでは暮らせなため、三年前からキリスト教系の孤児院（みよりのない子などを養育する施設）に預けられていました。夏休みに入り、「ぼく」と「弟」はふと思いついて、父が生まれ育つた祖母の家に帰ってきました。

「さあ、夕餉の支度が出来るまで縁側でも涼んでいなさい」

祖母に背中を軽く叩かれて、ぼくと弟は縁側へ出た。

縁側に腰を下し、足をぶらぶらさせながらぼくと弟はいろんな音を聞いていた。表を通り過ぎて行く馬の蹄の音、その馬の曳く荷車の鉄輪が小石をきしきしと砕く音、道の向うの川で啼く河鹿の声、軒に揺れる風鈴の可憐な音色、ときおり通り抜けて行く夕風にさやさやと鳴る松の枝、台所で祖母の使うボウチの音、それから、赤松の幹にしがみついても悲しく啼くカナカナ。

弟は庭下駄を突っかけて赤松の方へそっと近づいて行く。彼は昆虫を捕えるのが好きなのだ。

（……いまごろ孤児院ではなにをしているだろう）

ぼくは縁側の板の間の上に寝そべてて肘枕をついた。

（……六時。お聖堂で夕べの祈りをしているころだな。お祈りは六時二十五分まで、六時半から六時四十五分までが夕食。七時から一時間はハーモニカ・バンドの練習。八時から四十五分間は公教要理。八時四十五分から十五分間は就寝のお祈り……）

孤児院の日課を暗誦しているうちに、ぼくはだんだん落ち着かなくなっていく。しみじみとして優しい田舎のさまざまな音に囲まれているのだからのんびりできそうなものなのに、かえっていらいらしくくるのだった。生れたときから檻の中で育ったライオンかなにかがいきなり外に放たれてかえってうるたえるように、ぼくも時間の檻の中から急に外へ連れ出され戸惑っていたのだ。

立ってみたり坐ってみたり、表へ出たり裏へまわったりしながら、夕餉の出来あがるのを待った。

店の網戸を引く音がして、それと同時に*蚊やりの匂いが家中に漂いだした。

「さあ、台所のお膳の前に坐って」

祖母がぼくらに声をかけながら店の方へ歩いて行った。叔父にも食事を知らせに行ったのだろう。店と台所はぼくの歩幅にしてたつぷり三十歩は離れている。しかも店と台所との間には、茶の間に仏間に座敷に納戸といくつも部屋があつて台所から店を見通すことはできない。だから叔父は食事のときは一旦店を閉めなければならなかった。

店を閉めるのに三分や四分はかかりそうだった。ぼくと弟は台所の囲炉裏の横の板の間に並べられた*箱膳の前に坐つて叔父のくるのを待っていた。蚊やりの匂いが強くなった。見ると囲炉裏に蚊やりがく

16	受験番号
中	

国語 その二（八枚のうち）

べてある。

すぐに祖母が戻ってきた。

「叔父さんを待たなくてもいいよ」

祖母が茶碗に御飯をよそいだした。

「叔父さんは後でたべるっていつているから」

「どうかしたの？」

「どうもしないよ。店をいちいち閉めたりするのが面倒なんだろうねえ。それにいまはあんまりたべたくないそうだよ」

お菜は冷し汁だった。凍豆腐や青豆や茄子などの澄し汁を常時穴倉に貯蔵してある氷で冷した食物で町の名物だった。

「おや、変な茶碗の持ち方だこと」

しばらく弟の手許を見ていた祖母が言った。弟は茶碗を左手の親指、人さし指、中指の三本で摘むように持っていた。もっと詳しくいうと、親指の先と中指の先で茶碗を挟み、人さし指の先を茶碗の内側に引っかけて、内と外から茶碗を支えているわけである。

「それも孤児院流なんだ」

忙しく口を動かしている弟に代ってぼくが説明した。

「孤児院では御飯茶碗もお汁茶碗も、それからお菜を盛る皿も、とにかく食器はみんな金物なんだ。だから熱い御飯やお汁を盛ると、食器も熱くなって持てなくなる。でも、弟のようにすればなんとか持てる。つまり生活の智慧……」

「どうして食器は金物なの？」

「瀬戸物はこわれるからだよ」

祖母はしばらく箸を宙に止めたまま、なにか考えていた。それから溜息をひとつついて、

「孤児院の先生方もご苦労さまだけど、子どもたちも大変だねえ」

と漬物の小茄子を噛んだ。

「……ごちそうさま」

弟が*お櫃を横目で睨みながら小声で箸を置いた。

「もうおしまい？ お腹がいっぱいになったの」

弟は黙ったままである。ぼくは時間の籠が外れたので面喰ったが、弟は孤児院の籠を外せないで困っているようだった。ぼくは弟に手本を示すつもりで大声で、おかわりと言い、茶碗を祖母に差し出した。弟は一度置いた箸をまた取って、小声で、ぼくもと言った。孤児院の飯は盛切りだった。弟はその流儀が祖母のところでも行われていると考えて一膳だけで箸を置いたのちがいなかった。食事の後に西瓜が出た。そのときも弟は孤児院流を使った。どの一切れが最も容積のある一切れか、一瞬のうちに見比べ

16	受験番号
中	

国語 その三（八枚のうち）

バンザンしそれを手で掴むのがあそこでの流儀なのだ。

弟の素速い手の動きを見ていた祖母が悲しそうな声で言った。

「ばっちゃんのところは薬屋さんなんだよ。腹痛の薬は山ほどある。だからお腹の痛くなるほどたたべてごらん」

弟はその通りにした。そしてお腹が痛くなって仏間の隣りの座敷に横になった。祖母は弟に*蚊帳をかぶせ、吊手を四隅の鉤に掛けていった。ぼくは蚊帳をひろげるのを手伝った。蚊帳の、*ナフタリンと線香と蚊やりの混ったような匂いを嗅いだとき、ぼくは不意に、ああ、これは孤児院にない匂いだ、これが家庭の匂いだったのだな、と思った。思ったときから、夕方以来の妙にいらついていた気分が消え失せて、どこか知らないがおさまるべきところへ気持が無事におさまったという感じがした。

前の川の河鹿の啼き声かふつと跡切れた。夜突きに出ている子どもがいるらしい。箆で眠っている魚を突いて獲るのだ。河鹿と申し合せでもしたように、すぐ後を引き継いでドドンコドンドコドンと太鼓の音が聞えてきた。途中のどこかで風の渡るところがあるのか、太鼓の音はときどき震えたり弱くなったりしていた。

ぼくは座敷の隅の机の前にどっかりと坐ってトランクを縛っていた細紐をほどいた。持ってきた本を机に並べて、座敷を自分の部屋らしくしようと思ったのだ。

「そのトランクは死んだ父さんのだろう」

祖母がトランクの横に坐った。

「よく憶えているんだなあ」

「わたしが買ってやったんだもの」

祖母はトランクを指で撫でていた。

「死んだ父さんが東京の学校へ出かけて行ったときだから、三十年ぐらい前のことかしらね」

トランクを撫でていた指を、祖母はこんどは折りはじめた。

「正しくは三十一年前だねえ」

「もうすぐお祭だね」

ぼくは太鼓の聞えてくる方を指さした。

「あれは獅子舞いの太鼓だな」

「そう、あと七日でお祭」

「ぼくたち、祭まで居ていい？」

ほんの僅かの間だが祖母は返事をためらっていた。

「駄目かな、やっぱり」

「いいよ」

返事をためらったことを耻じているような強い口調だった。

16	受験番号
中	

国語 その四（八枚のうち）

「おまえたちはわたしの長男の子どもたちだもの、本当ならおまえがこの家を継ぐべきなのだよ。大威張りでいいよ」

この祖母の言葉で勇気がついて、当分言わないでおこうと思っていたあのことを口に出す決心が出た。「ぼっちゃ、お願いがあります」

急にぼくが正坐したので祖母が愕いた眼をした。

「母が立ち直ってぼくと弟を引き取ることが出来るようになるまで、ぼくたちをここへ置いてください」「……でも高校はどうするの」

「この町の農業高校でいいんだ。店の手伝いでもなんでもするから」

祖母はぼくと弟をかわるがわる眺め、やがて膝に腕を乗せて前屈みになった。

「孤児院はいやなのかね、やはり」

「あそこに居るしかないと思えばちつともいやなところじゃないよ。先生もよくしてくれるし、学校へも行けるし、友だちもいるしね」

「そりやそうだねえ。文句を言ったら罰が当たるものねえ」

「で、でも、他に行くあてが少しでもあったら一秒でも我慢できるようなところでもないんだ。ぼっちゃ、考えといてください。お願いします」

店で戸締りをする音がしはじめた。祖母はトランクの傍から腰を上げた。

「叔父さんの食事の支度をしなくっちゃ。今のおまえの話はよく考えておくよ」

祖母が出て行った後、ぼくはしばらく机の前に、ぼんやり坐っていた。この話をいつ切り出そうかとじつはぼくは迷っていたのに、それが思いがけなくすらすらと口から出たので自分でも驚いてしまったのだ。気が軽くなって、ひとりで笑い出したくなった。ぼくはその場に仰向けに寝転んで、ひよつとしたらぼくと弟が長い間寝起きすることになるかもしれない部屋をぐるりと眺め廻した。そして何日ぐらいで、弟の孤児院流の茶碗の持ち方が直るだろうかと考えた。弟は蚊帳の中でキソク正しい寝息を立てている……。ぼくは蚊帳の中に這って行って、出来るだけ大きく手足を伸ばして、あくびをした。

縁側から小さな光がひとつ入ってきて、蚊帳の上に停った。それは蛭だった。

へ行手示す 明けの星

船路示す 愛の星

空の彼方で 我等守る……

孤児院で習った聖歌を呟いているうちに、光が暗くなって行き、ぼくは眠ってしまった。

どれくらい経ってからかわからないが、叔父の声で目を覚めた。蛭がまだ蚊帳の上で光っていたから、どっちにしてもそう長い間ではなかったことはたしかだった。

「……いいかい、母さん、おれは母さんが、親父が借金を残して死んだから学資が送れない、と言うから学校を途中で止してここへ戻ってきたんだ……」

国語 その五（八枚のうち）

叔父の声は震えていた。

「店を継いでくれないと食べては行かれないと母さんが頼むから菓種業の試験を受けて店も継いだ。借金をどうにかしておくれと母さんが泣きつくから必死で働いている。これだけ言うことをきけば充分じゃないか。これ以上おれにどうしろというんだよ」

「大きな声を出さないでくれ。あの子たちに聞えるよ」

「とにかく母さんの頼みはもう願いさげだよ」

叔父の声がすこし低まった。

「今年のクレは裏の畑を手離さなくちゃ年が越せそうもないっていうのに、どうしてあの二人を引き取る余裕なんかあるんだ」

祖父はだいぶ大きな借金を残したらしかった。それにしても裏の畑を手離すことになったら祖母の冷し汁の味もずいぶん落ちるにちがいないと思った。冷し汁に入れる野菜はもぎたてでないと美味しくないからだ。

「子ども二人の喰い扶持ぐらいどうにかなると思うんだけどねえ」

「そんなことを言うんなら母さんが店をやるんだな。*薬九層倍なんていうけど、この商売、どれだけ儲けが薄いか母さんだって知ってるはずだよ。とくにこんな田舎じゃ売れるのはマーキュロか正露丸だ。母さんと二人で喰って行くのがかつつかつたぜ」

「でも、長い間とはいわない。あの子たちの母親が立ち直るまででいいんだから」

「それがじつは一番腹が立つんだ」

叔父の声は前よりも高くなった。

「あの二人の母親は親父の、舅の葬式にも顔を出さなかったような冷血じゃないか。そりゃあの二人の母親は親父や母さんに苛められたかも知れない。でも相手がこの世から消えちまったんだ。それ以上恨んでもはじまらないだろ。線香の一本もあげにすればいいじゃないか。向うが親父を許さないのなら、そのことを今度はおれが許さない。おれはいやだよ。あの子どもの面倒など死んでも見ないよ」

「でもあの子たちはおまえの甥だろうが……」

箱膳のひっくり返る音がした。

「そんなにいうんなら、なにかも叩き売って借金を払い、余った金で母さんが養老院にでも入って、そこへあの二人を引き取ればいいんだ。おれはおれでひとりで勉強をやり直す」

叔父の廊下を蹴る音が近づき、座敷の前を通過してその足音は店の二階へ消えた。叔父は赤松が目の前に見える、店の二階の一番端の部屋で寝起きしているのだろう。

いまの話や弟が聞いていなければいいな、と思いつつながら、弟の様子を窺うと、彼は大きく目を見開いて天井を睨んでいた。

「……ぼくたちは孤児院に慣れてるけど、ぼっちゃは養老院は初めてだよね」

16	受験番号
中	

国語 その六（八枚のうち）

弟はぼそぼそと口を動かした。

「そんなら慣れてる方が孤児院に戻ったほうがいいよ」

「そうだな」

とぼくも答えた。

「他に行くあてがないとわかれば、あそこはいいところなんだ」

蚊帳に貼りついていていた蛭はいつの間にか見えなくなっていた。つい今し方の叔父の荒い足音に驚いて逃げだしたのだろうとぼくは思った。

ぼくはそれから朝方まで天井を眺めて過した。これからは祖母がきつと一番辛いだろう。「じつはそろそろ帰ってもらわなくちゃ……」といういやな言葉をいつ口に出したらいいかとそればかり考えていなくてはならないからだ。店の大時計が五時を打つのをしおに起き上って、ぼくは祖母あてに書き置きを記した。ごく簡単な文面だった。

「大事なことを忘れていました。今夜、ぼくら孤児院のハーモニカ・バンドは米軍キャンプで慰問エンゾウをしないではないのです。そのために急いで出発することになりました。ぼつちや、お元気で」
書き置きを机の上ののせてから、ぼくは弟を揺り起した。

「これから孤児院に帰るんだ」

弟は頷いた。

「ぼつちやや叔父さんが目を覚ますとまずい。どんなことがあっても大声を出すなよ」

「いいよ」

弟は小声で言って起き上った。

ぼくらはトランクとポストンバッグを持って裏口から外へ出た。裏の畑にはもう朝日がかつと照りつけていた。足音を忍ばせて庭先へ廻った。

（井上ひさしの文による）

（注） *蚊やり……………煙で蚊を追い払うために燃やすもの。

*箱膳……………一人分の食器を入れておく箱。食事の時は料理をのせる台とする。

*お櫃……………めしびつ。ごはんを入れておく木製の器。おはち。

*蚊帳……………蚊を防ぐために四隅をつつて寝床をおおうもの。目のあらい布で作る。

*ナフタリン……………独特のにおいを持つ防虫・防臭剤。

*薬九層倍……………薬の値段というのは原価に比べて不当な利益を得るものだ、という世間の見方。

16	受験番号
中	

国語 その八（八枚のうち）

問五 文中には三か所「蛍」が登場します（□で囲ってある）。この「蛍」の、現れて消える描かれ方には、時間の経過を表すほかに、どのようなことが暗示されていると考えられますか。

問六 「……ぼくたちは孤児院に慣れてるけど、ぼっちゃんは養老院は初めてだよね」「そんなら慣れてる方が孤児院に戻ったほうがいいよ」とあるが、このときの「ぼっちゃん」に対する「弟」の気持ちを説明しなさい。

問七 「ぼくは祖母あてに書き置きを記した」とあるが、この「書き置き」の内容は事実ではないと思われれます。なぜこのような書き置きを記したのか、理由を説明しなさい。

問八 文章中のカタカナを漢字に直しなさい。

	ホウチヨウ	ハンタン	キノク
	クレ	エンソウ	